

Ⅶ-21 那賀川流域住民の河川イメージに対する意識調査

四国電力(株) 正 ○兵庫孝英
阿南高専 遊佐貴子

阿南高専 正 湯城豊勝

1. はじめに

吉野川第十堰問題に伴う住民投票や那賀川細川内ダム建設是非論にみられるように、河川における住民の合意形成の必要性や住民参加型川づくりは全国的に注目されつつある。さらに、流域の差異による河川イメージの違いを把握することは、今後の河川事業を円滑に実施するために重要なものである。本研究では、那賀川流域住民の河川イメージに関する意識調査を実施し、上・中・下流域の住民意識の違いを分析した。

2. 調査対象流域の状況

那賀川は、木頭村、木沢村、上那賀町、相生町、鷺敷町、羽ノ浦町、那賀川町、阿南市を貫流し、紀伊水道に注ぐ県内2番目の1級河川である。この間の流路延長は125km、流域面積は874km²、流域人口92,000人に及ぶ。全国的主要河川の中でも河川勾配が急であり、洪水の流出が早く、流出量も短時間で急激に増加する傾向にある。上・中流部は、年間3,000mmを超える多雨地帯で、最大日雨量では流域内の日早が1,114mmで全国1位となっている。また、兩岸に高く迫った溪谷は、地勢的に電源地帯として好条件を備えており、多目的ダムの長安口ダムをはじめ、発電用ダムとして川口、小見野々ダム等が建設され、洪水調節および那賀川の総合開発の中で重要な役割を占めている。

3. 調査方法

今回実施したアンケートでは、Ⅰ) 那賀川との関わり、Ⅱ) 昔との比較、Ⅲ) 治水・利水・環境に対する現状認識と期待する将来像、Ⅳ) 那賀川に対する今後の取り組み、Ⅴ) 那賀川の存在・価値に大別され、41の質問項目を設定した。配布については、筆者らの知人、上・中・下流の25人、計75人の代表者にアンケート用紙10部ずつを送付し、その代表者には勤務先や近所の人に配ってもらい郵送回収をした。

4. 集計結果および考察

回収率は、下流域では70%以上であったのに対し、上流域になるにつれ回収率は減少し、上流域での回収率54%、全体で63%であった。

10代、20代といった若年層の意見が少なく、上流域では5%程度であった。アンケートの配布に協力して頂いた75人の人がやや高齢であったことがひとつの原因と思われる。また、職業別においては、会社員と公務員の占める割合が多く、特に上流部では公務員が約40%を占めているのが特徴である。

まず、那賀川のアール「阿波の八郎」の認識度を把握するために実施した質問では、各流域とも40%未満の人がアールを知らないことがわかった。また那賀川源流の認識度では、上流域から下流域にかけて減少傾向にある。上流域では源流に近距離であるため80%を越えて知っている人がいる。中流域においても比較的、源流を認識している人が多く、これは中流域でも溪流釣りを趣味としている人が多いためと思われる。

並行して、「那賀川へどの程度いきますか」という質問を実施したが、下流域では「年数回」、「全然行かない」といった回答が大半を占め、那賀川へ行く回数は上流域から下流域にかけて減少する傾向が顕著に表れている。上流域や中流域では溪流釣りやカヌーといった趣味を持つ人が多く、下流域では吉野川のような水上スキーやウィンドサーフィンといったレジャーが少ないためと思われる。また、上流域では川に沿っての道が多いため、那賀川に対する意識が高くなっていくものと思われる。

つぎに、那賀川の治水状況について、流域住民がどのように考えているかを質問した。「今後洪水は発生すると思いますか」という質問では図-1のように中流域において「可能性が高い」、もしくは「絶対発生す

る」と答えた人が60%近くを占め、また「発生しない」と答えた人はいないという結果が得られた。また那賀川を「危険であるか否か」を問う質問では、「危険な川」と思う人は全体で20%近く占めており、なかでも中流域においては他流域と比較すると若干多く、また「安全である」と答えた人は一番少ない傾向があらわれている。これは、昭和46年8月30日に驚敷町で多くの家屋や田畑の浸水被害があり、この記憶がまだ残っている影響と思われる。しかし各流域とも、約80%の人が危険でないと思っており、危険認識度が薄いことが伺える。

利水対策面では「渇水を少なくするにはどのようにすればよいと思いますか」という質問について、図-2に示すように、「上流部に木を植える」、「上流部の森林の手入れ」といった広葉樹の植林、間伐により解決しようとする意見が一番多い。どの流域においても半数以上を占めているところを見ると、マスコミの影響が大きいことが伺える。また、「ダムに堆積した土砂の取除き」においても、各流域とも約20%以上を占めている。「新たなダムの建設」という意見は下流になるにつれ顕著に増加している。

最後に、河川構造物に関する意識の違いを把握するため、「流域河川構造物と聞いて最初に思い浮かぶものは何ですか」という質問を行った。図-3に示すように、上流域では「ダム・砂防ダム」と回答した人が80%いるのに対し、下流域では40%にも満たないことがわかる。対象的に下流域では「橋梁」、「河川敷グラウンドおよび公園」、「堤防」と答えた人が目立つ。やはり、河川構造物として思い浮かぶものは身近にある河川設備であることが伺える。

つぎに、「河川構造物で必要ないと思うものは何ですか」という質問では、図-4に示すように、上流域では「ダム・砂防ダム」、下流域では「全て必要である」と、流域住民による価値観の違いが大きくあらわれている。

以上のように、各回答には流域住民の過去の体験や経験、さらには現在の状況によって影響されていることが分かった。

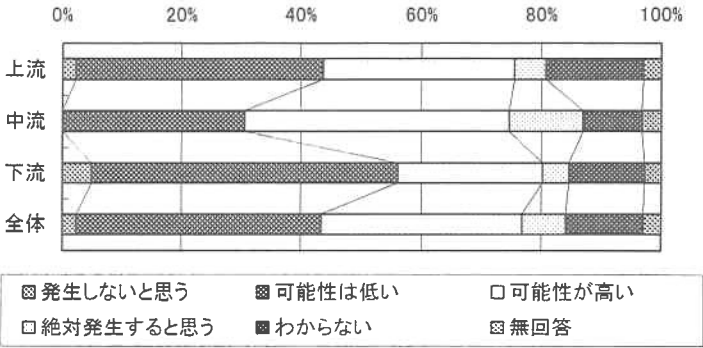


図-1 今後洪水は発生すると思いますか

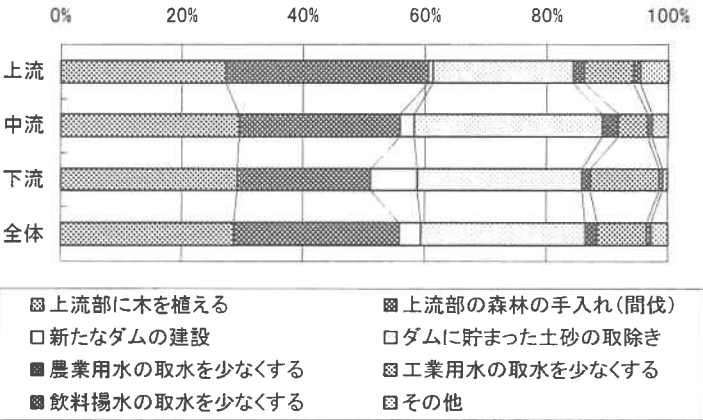


図-2 渇水を少なくするにはどのようにすればよいと思いますか

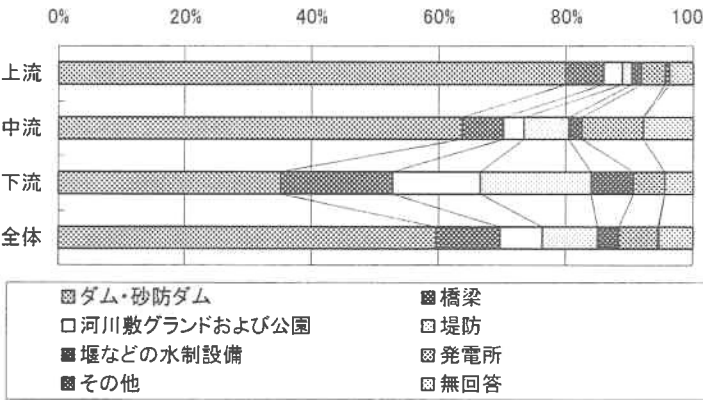


図-3 河川構造物と聞いて最初に思い浮かぶものは何ですか

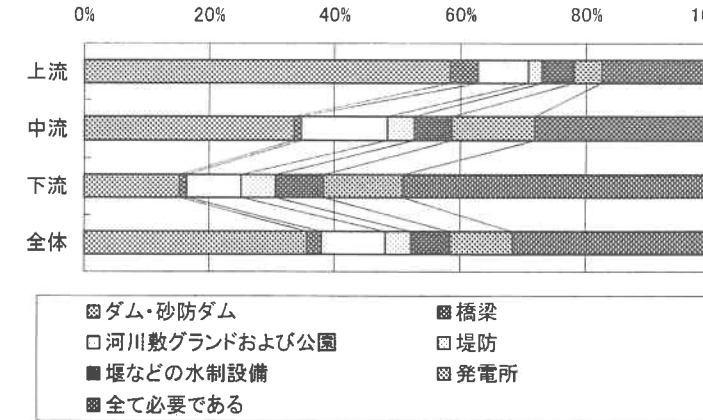


図-4 河川構造物で必要ないと思うものは何ですか